

郷土あかし

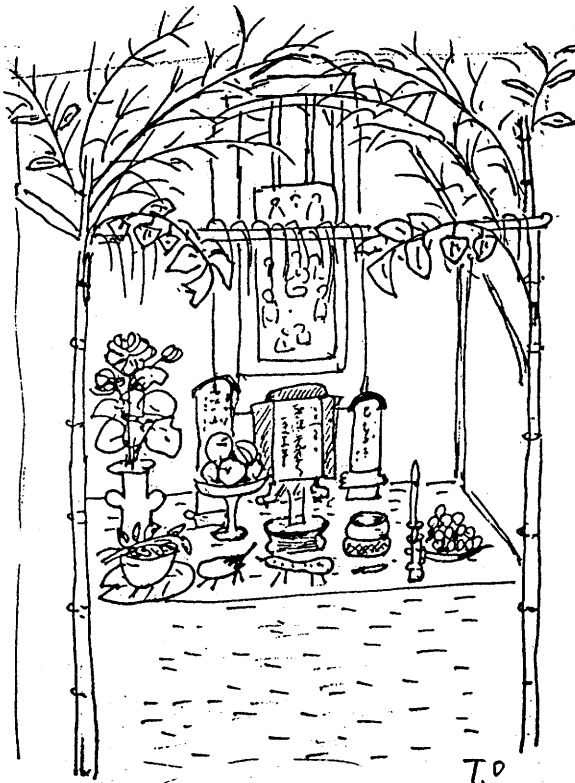
郷土館だより
第31号

五日市町立
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069

五日市の年中行事 その2

— 大正末期～昭和初期 —

ふるさとを学ぶ会



盆棚

1. 7月の行事

○お盆様

お盆の行事は、正月と並んで最も重要な年中行事である。前号でもふれたように、正月とお盆の行事構成はよく似ていて、たとえば正月の七草に対して盆には七夕があり、16日のやぶ入りも両方にある。また形はちがうが、火祭りもあり、その他似ている点が多いが、正月が神祭的であるのに対して、お盆は仏教的な行事であるといえ

る。いうまでもなく、お盆は先祖の霊を家に迎えてもてなし、そしてお送りするという行事である。供養の仕方は、その地方や家によってちがいはあるが、墓参りをし、迎え火・送り火を焚き、盆踊りをするという行事は今も広く一般的に行われており、五日市においても同様で、いく分簡略化されてはいるものの現在も実施率の高い行事である。

五日市では大正12年までは8月にお盆をしていたが、その後はほとんどの家が7月に行うようになったようである。

○盆棚

盆棚は正月の年棚に当るもので13日に作る。正月の年棚を作る家がいへん少なかったのに対して、盆棚を作る家は調査範囲で40%とかなり多かった。

盆棚は細い若竹を四方に立てて棚を設け、新しいゴザを敷く。(乙津O家) 仏壇とは別に棚を作り、若竹2本を左右に立ててゴザを敷く。(留原K家・伊奈N家・戸倉A家) 若竹2本を左右に立て、それらをたわめて先端を合わせ紐で結び、横に1本竹をわたす。(伊奈N家・戸倉H家) 特に盆棚を作らない家では仏壇の左右に若竹を立てて綱か竹をわたし、これにそうめんなどをかける例が多かった。以上のように家によって作り方に多少のちがいはあるものの、若竹を使い新しいゴザを敷くのは共通のようである。こうして盆棚が出来上ると仏壇から位牌を出して盆棚へ移す。

○供え物

精霊の乗り物として、ナスに竹の枝で足をつけて馬をつくる。山田のY家ではキュウリで牛をつくるという。こうしてできた牛馬は芋の葉の上にのせる。(本来は蓮の葉) ドンブリ等に水を入れ(五日市N家では芋の葉も入れる) ミソハギを束ねたもので、馬に水をかけてやる。

ミソハギはミソギハギ（襖萩）の意から盆花として供えられるが、この花が手に入らない時は笹の葉を使ったという（五日市N家）。次にそうめんを供える家が多かったが、これは盆棚の上に渡した竹や綱に、しんなりさせてかける。伊奈N家では、ナスで作った馬の背にもそうめんをかけるそうである。その他、家で作った初物の野菜やビワ、ホオズキ等、また酒まんじゅうを供えるという家も多い。山田Y家では、そのまんじゅうが残ると、いたまないように涼しい井戸に下げて保存したそうであるが、これも冷蔵庫等が普及していなかった頃の生活の知恵であろう。

そして新盆の家では盆提灯を吊す。

○迎え火

お盆様の飾り付けが出来上ると、いよいよ先祖の霊をお迎えするために迎え火を焚く。これの実行率はたいへん高く、養沢地区のように神葬祭のところでも焚いている。迎え火は13日の夕方、家の門口で焚くという家が一番多かったが、戸倉A家では墓地→道の曲り角→家の門口の3ヵ所で焚く。先祖の霊が煙に乗って迷わずに家まで来られるようにという心づかいだと思う。伊奈N家では、迎え火を焚き提灯を持って出迎え、「どうぞどうぞ」といって家の中へ案内したそうである。伊奈通りの家では14日と15日の夕方火を焚くとのことであるが、これは先祖を祀る火祭り行事の一つであろう。伊奈N氏の話では、家でとれた麦ワラを一度に3把も燃やしたそうで、当時伊奈通りでは、各家々が次から次へと火を焚くので、赤々としてきれいだったそうである。燃やすものは、調査した全部の家が麦ワラであった。留原のK家などではこの日に使う麦ワラを特別に作っておいたそうである。

○送り火

送り火は16日の夕方精霊をお送りするために焚く。迎え火とは逆に家の門口→道の曲り角→墓地の順になるが、やはり略して家の門口だけで焚く家がほとんどである。地域によっては送り火を15日に焚くところもあり、この近くでは秋川市などにその例があるが、五日市町では16日である。しかし戸倉H氏の聞き取りの中に仏様が嘆いた言葉として「待つお盆は3日、くされ彼岸は7日ある」とあるので、あるいは五日市でもお盆は3日間で15日にお送りしたところがあったのかもしれないが、今回はそこまで調査が及ばなかった。

送り火のほかに盆送りには盆棚の後始末があるが、調査したところでは●川へ流した（五日市S家、伊奈N家、山田M家、養沢T家）●山のふもとへ納めた（戸倉A家）

●墓地のそばの山へ納めた（乙津O家）●方角のよい、きれいな所へ埋めた（辰巳の方角）（山田M家）などで川が近いところでは、みな川へ流したようである。最近では川を汚すのでそれもできなくなり、役場のお世話で始末している。

灯ろう流しも盆送りの行事であるが、これも各地で観光的な色彩を帯びたものになっている。

○その他

乙家O家では、盆棚の前で僧侶が読経して先祖の霊を祀るいわゆる棚経をあげるが、現在でも僧侶が盆の間に檀家をまわられるそうである。

また施餓鬼にお寺へ行くという家も多い。もともとは無縁仏の供養を僧侶が行うのが施餓鬼であったが、今はすべての精霊供養で、お寺によって日が決まっているようである。

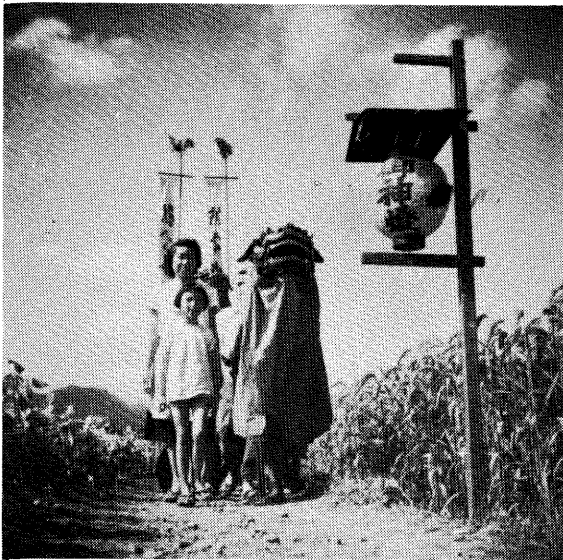
盆踊りも精霊を慰めるための踊りで、盆の儀式の一つであったが、最近は娯楽として行われるようになり、五日市でも五日市祭りの中で続けられている。

2. 9月の行事

○ミクンチ（9月9日・19日・29日）

三九日にミクニチ・サンクニチ・ミクンチなどといい、クニチは「供日」の意で神に供え物をする祭りの日であった。9月9日は一般に重陽の節供といわれる日であるが、初9日（ハツクニチまたは初節供）、19日は中の9日（ナカノクニチまたは中の節供）29日は、しまい9日（または、しまい節供）とよび、この日にはミクンチナスといって、茄子を食べる習慣が関東地方でもかなり広く分布していたようである。五日市でもミクンチナスを食べたという話をきくことはできたが、実施率は少ない行事である。●三つの苦を抜くといって茄子を食べた。悪病除けといわれた（小庄U家）●茄子を食べると幸せになるという（山田Y家）●餅をつき、おはぎも作った。（留原K家）●中の9日に赤飯を炊く（山田Y家）●初9日に雨が降ると中の9日も、しまい9日も雨が降るといわれた。たしかに29日の阿伎留神社の祭礼は雨の日が多かった。（五日市N氏）

聞き取りの中でミクンチの行事を実施した人、何もしないが聞いたことはある人とを合わせて35%程度で、個々の家での実施率は少ないが、五日市の阿伎留神社をはじめとして、この日にはあちこちの神社で秋祭りが盛んに行われている。近隣の神社の例祭日をいくつかあげてみると、9日は秋川市の二宮神社、19日は草花神社、29



秋祭りのはしり 留原天王さま(八坂神社) (S31)

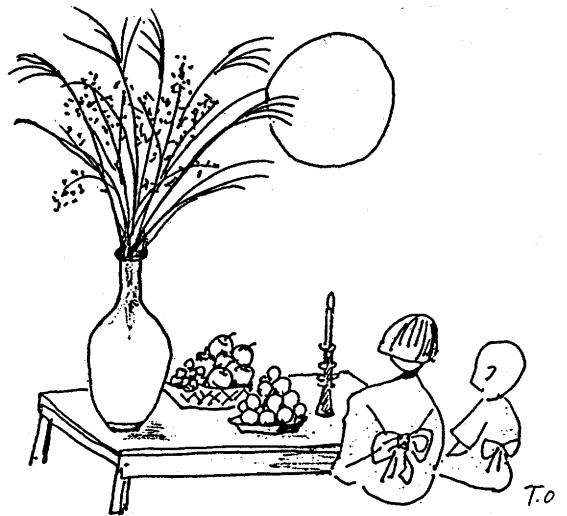
日は熊野神社、日の出町では春日神社、三嶋神社等で、そのほか多くの神社がこの日を例祭日としている。

○十五夜 (旧暦 8月15日)

旧暦の秋は7・8・9月の3ヵ月で、真中の8月を仲秋といい、この夜の満月を「仲秋の名月」といって、いろいろの供え物をしてお月見するのが十五夜の行事である。季節の作物を供え物とするのは収穫祭の一つであり、農耕儀礼として古くから行われてきた行事である。五日市の今回の調査では実施率65%であるが、当時はもっと高率で、子どもたちにも親しまれた行事であったように思う。

縁側に机を出してその上に供え物を飾りお灯明^{おみなし}をあげる。白鳥徳利や一升ビンに、ススキ、野菊、女郎花、十五夜花(紫苑)などの花草をさし、家で採れたサツマイモや里芋などの野菜と柿、栗、ダンゴ等を供える。これらの供え物はどこの家でも同じようである。その他山田Y家では丸い物を供え、養沢Y家では丸くつくったボタモチを供えたそうである。小庄U家では、まんじゅうなど火にかけたものは供えないそうだし、乙津O家でも煮たものは供えないそうである。

当時十五夜で特徴的なことは、男の子どもたちが、近所の家々をまわり、供え物のダンゴなどをぬすみ取りに歩いたことである。十五夜には、この子どもたちのいたずらも許されていて、むしろわざと取られるふうであった。それは月の神様に捧げた物を、広くみんなで分け合うという考えで、かなり全国的に行われていたようである。



十五夜

伊奈N氏(69才)の話では、なるべく裕福な家に行って取ってきたそうで、粗食の時代に米の粉で作ったおいしいダンゴが食べられるので、十五夜はとても楽しみだったそうである。養沢Y氏(72才)の話も同じようであったが、そのほか供え物を取る道具について話してもらった。それは材木を移動する時に使うトビに似せて針金を曲げたものを、棒の先につけたものや、魚をとる道具のサクリ(ヒッサクリ)という針を長い篠竹の先につけたものなどで、これを供え物に突きさしたり、ひっかけたりして取った。その頃の男の子たちのみなりは着物であり、取ったものをそのままふところに入れるので、ボタもちなどどと着ているものがひどく汚れてしまったとか。現在62才のT氏にも、年上の餓鬼大将につれられて、ヒッサクリを持って加わった経験があるそうで、そのことから考えてみても、昭和10年前後まで行われていたのではないかと思う。

この十五夜の話は、どの方も少年時代にかえったように、生き生きと楽しそうに話してくれたのが印象的で、当時の子供たちの様子が目に浮かぶようであった。

○十三夜 (旧暦 9月13日)

十五夜が芋を供えるので「芋名月」と呼ぶのに対して、十三夜は「栗名月」とか「豆名月」とかいう。片月見はいけないといわれ、十五夜をする时必须十三夜を祝うのが常であった。しかし、十五夜ほど盛んでないようで、実施率もいくらか低かった。供えるものは、農作物などに時期的なちがいは多少あるが、十五夜の時とほぼ同じ

であった。

伊奈N氏のお話では、十五夜に男の子が供え物を取りにまわったようなことは十三夜にはなかったとのことであるが、養沢のT氏によると、十三夜にも行われたそうである。その頃になると栗・柿・とうもろこしなどができるので、むしろ十五夜よりも供え物が多くて、楽しみであったという。

○秋の彼岸（9月23日前後）

秋分の日を中日として、その前後7日間で、「暑さ寒さも彼岸まで」といわれ、この時期は一番すごしよい。季節の区切りである。各地で仏事が行われ、先祖の霊を供養し、故人を偲ぶ日である。一般には墓参をし、おはぎ（春はボタモチといって大きく丸くつくり、秋はオハギといって卵形に小さめにつくる）を作って仏様に供えることが行われているが、五日市でも同様で、調査範囲では全部の家が実施していた。年中行事の中には、廃れてしまったものもたくさんあるが、祖霊を祀る行事に関しては、今も変わらず続けられているようである。

3. 10月・11月の行事

○亥の子（旧暦10月亥の日の亥の刻）

旧暦10月の亥の日の亥の刻に、新米で作った餅やボタモチを食べるといふ行事である。この「亥の子餅」を食べると万病を除くとか、猪は多産なので子孫繁栄を招くといふ祝った。

また稲の収穫祭と結びつき、田の神が山へ帰る日であるとして、送り返す儀礼でもあり、重要な農村行事であった。関東では10月10日の十日夜（とうかんや）に行われるそうである。

留原K家・伊奈N家ではイノコノボタモチを作って、神様に供えたという。何も知らないが亥の子のことは聞いたことがあるという人を含めても20%で、五日市では実施率が低く忘れられている行事であるように思う。

一方伊奈N氏の話によると、10月亥の日の晩に、秋川市淵上の出雲神社から、荷車に太鼓をのせて、車の先につけた綱を20人ほどの若い衆が引っぱって「イノコノボタモチ マルメロ マルメロ」とはやしながら、伊奈の宿までやってきたそうである。みな「イノコノボタモチが来た」といって見物に出たという。

○恵比須講（10月20日または11月20日）

正月の恵比須講は商家が祭るが、秋は農家が祭る。農村では10月20日に行うところが多いが、五日市においては、約8割が11月20日に行っている。正月と秋の2回と

も行うという家が多いが、五日市N家では正月だけ、山田Y家では11月だけ祭るそうである。供え物等の内容は正月とほとんど同じである。正月は恵比須様が働きにお出かけになるというので朝祝ったのに対して秋は恵比須様が働いて帰って来られるといふ夜祝った。

戸倉T家では、嫁について出戻らないようにと、恵比須様に供えたご飯を、親が一口食べて釜に戻し、それを皆に食べさせたそうである。

○帯解き祝（七五三祝）（11月15日）

帯解き祝いとは、子供が付け紐をやめて、はじめて帯を用いるお祝いの儀式である。

男女とも七才になると、晴着を着て神社にお参りし、お祝いをする。正式には男の子は五才で袴着（ハカマギ）女の子は七才で帯解き（オビトキ）といったが、この辺では男女とも数え年七才で祝う。当時の様子を聞き取りの中から、いくつかあげてみると、養沢T氏・帯解き祝いは大正14年にしたが、カスリの着物と羽織に縞の袴を付けて、平井の親戚まで歩いていった。

五日市K氏・母に晴着を着せてもらい、丸いお餅を、大きな飯台に入れ、それをリヤカーに積んで親戚や仲人に配った、乙津O氏・昔は貧富の差がはげしかったので、大尽（金持ち）が祝って貧乏な家では行わなかった。

戸倉A氏・七五三祝いも昔は地味で質素であった。しかし精神は豊かであった。

A氏のことばは、最近のすべてに通用するもので強く心に残った。

4. 12月の行事

○川びたり（12月1日）

馬の正月、橋かけの日、おわりのついたち、などといって、カワビタリモチをついて食べた。馬が重要な労働力であった時代であるから、馬の労をねぎらうお祭りとしてかなり盛んに行われていたようである。聞き取りの中では、65%の人が知っており、55%の人が実行していた。ついた餅は大福にしたり、ベツラ餅にしたり家によっていろいろであるが、馬のいない家でも餅をついたという。（戸倉A家）

養沢Y氏の話では、当時養沢で馬を飼っていた家は、10軒位あり、回り番で馬の正月の宿をしたそうである。当日はその宿へ馬方が集まって餅をつき、その餅をうすく丸くして、あんこをまぶしたのを作り、一杯飲みながら食べる。そしてあんころ餅は皆で分けて家に持ち帰り、飼っている馬にも食べさせ、馬頭観音にも供えたと

『秋川谷の風物詩』より



橋
か
け

川びたりの日の橋かけ 故田島寿氏

いう。これは全国的に行われて
いる行事で、五日市でも実施率
が非常に高く、現在も続けられ
ているものの一つである。また
冬至の日が正月を迎える準備の
大掃除や、おかまじめの日にな
っている家もあり、ここまでき
ると正月も目前である。

(文・谷合益子
さし絵・大場智子)

いう。

またこの日は橋かけの日といい、川へ橋をかけたり、
人足で道普請などをしたりした。(留原K氏)

伊奈N氏によると、当時伊奈では中宿下、帳元下、清
水下、弁慶下、の四ヵ所へ青年団の奉仕で橋をかけたそ
うである。冬は川の水も少なくなるので、川の中へ石を
積み、丸太を渡して板を張って作る。山の木の伐採や、
山の手入れ、薪ひろい、山のくずはきなど当時の生活に
はなくてはならない橋であった。この橋は大水の出る前
に引き上げておくそうである。(戸倉A氏)

また乙津O家では「おわりのついたち」を祝うそう
で餅をついて神棚と仏様に供え、家中で食べたという。

○事八日(12月8日)

2月8日の「ことはじめ」に対して、12月8日は、「
ことおさめ」といい、所によっては鬼のくる日、カブダ
ンゴなどともいう。内容は、前号で紹介した2月8日の
事八日とほとんど同じであるので省略する。山田Y家
では、12月の事八日にはカブを煮て食べた。また乙津O
家では、茹でたカブと、もろこしで作ったダンゴに、あん
をまぶして「あんころダンゴ」を作り、魔除けに食べた
そうである。

○冬至(12月22日または23日頃)

冬至は一年中で日照時間が最も短い日である。この
日はどこの家でも柚子湯に入り、カボチャを煮て食べる。
中気にならないようにとか、風邪をひかないようにとか

5. 続・お年寄75人に聞きました

— 数字が語る むかしの行事 %は実施率 —

- お盆(7月13日～16日) 盆棚をつくる 40%。
供えもの(盆飾) なす、きゅうりの馬・牛 85%。
そうめん 69%。盆提灯 32%。迎え火(13日) 76%。
送り火(16日) 72%。火を炊く場所は墓前が 5%あ
った。内墓と思われる。
盆のご馳走。おまんじゅう、そうめん、ちらし、精進
揚げ、ぼたもち等 回答数少く、決定的なものはない。
- ミクンチ(9月9日、19日、29日)
知っている 9%。なすを食べた記憶がある 1名。
ごく印象の薄い、実施率の少ない行事と思われる。
- 十五夜(旧暦8月15日) 64%。
供えもの すすき 65%(白鳥と呼ぶお爛徳利や一升
ビンにさす) さとも 54%。だんご 52%。やつが
しら 36%。その他 さつまいも・栗・柿など。「子
供が供えものを盗みもらいする習慣」記憶がある 16
%。ただし実行者0%(女の子はやらなかったらしい)。
- 十三夜(旧暦9月13日) 45%。
- 秋の彼岸(9月23日前後)
墓参 85%。おはぎづくり 76%。
- イノコノボタモチ(10月亥の日)
知っている 19%。畑の収穫を祝う日。大根畑に入ら
ない等の回答あり。(本文参照)

○恵比須講（10月20日または11月20日）

10月にやる 12%。11月にやる 47%。

五日市の商店では正月の20日にやるだけで秋はやらない家がある。秋の恵比須は農家为中心で、そのため、より暇のできる11月実施が多いようだ。内容は正月20日と同じ。

○帯とき祝（七五三）（11月15日）

男も女も七才で祝った。親もと（嫁の実家、仲人など）には飯台で餅を配る。口取りで小さな結婚式のように祝った。以上回答例。

○川びたり（12月1日）

知っている 37%（うち言葉だけ23%）

内容についての回答 ●餅をつき大福をつくる。●牛馬のまつり（慰労） ●川に橋をかける。

本文によれば、馬をよく飼っていた周辺地区、川かけ行事のあった伊奈地区など、盛んな行事であった。

○冬の事八日（12月8日） 2月8日と同じく

知っている 10%。記憶稀薄。

○冬至（12月下旬）

ゆず湯に入った 90%。かぼちゃを食べた 80%。

意外に実施率が高い。季節感の強い行事。

（回答者は五日市のシルバーコーラス会員80代～60代の女性、五日市地区外で生活歴をもつ方も混る。詳細は30号参照）。

おわりに

前回、年中行事成立の要素として、1.宗教関係、2.生産関係、3.人生儀礼の三つをあげた。いま年中行事の多くが、すたれた原因をこの三要素にもとづいて考察してみよう。

1の核にあたる民間信仰には、呪術的な面—いわしの頭につばをつけて焼くと虫よけになる—や、タブー（～してはいけないという禁忌）—お払いの幣束を辻にさしたあとは振向いてはいけない。夜爪を切ると親の死目にあえない等—の面を含むが、これらは現代の合理的な考え方にはなじまない。人間の弱さへの自覚、人力をこえた魔性の力（自然災害や疫病をひきおこす）への恐怖が禍をさけ福を招く行為として年中行事を成立させてきたのに、そうした恐怖—精神的呪縛からの解放は同時に行事からの解放につながった。

次に、2の生産関係についてみると農業の変質があげられる。今では農業従事者の絶対人口は激減し、農業はマイナーな職業の一分野にすぎなくなり、年中行事の基

盤にあった農業生活の共同性、連帯性は失われ、都会風の個人生活が社会の常態となった。従って、年中行事のうち今なお残るものは、第3の人生儀礼に関するもので、3、5月の節句、七五三等は、コマースリズムの波に乗せられ、内面はとにかく、表面的にはかえって華やかになった。従来の年中行事の楽しみを中心に、米や小豆を持ちよって共同調理・共同飲食する風習があったが、飽食の時代の到来はその実を失わせた。また盆飾りも精霊流しもゴミの心配が先立つ有様で、どちらを向いても四面楚歌というのが伝統行事のおかれた状況である。

行事の伝承が断絶する別な有力要因も考えられる。それは核家族化の進行で、本来行事の伝承は好奇心旺盛な子供の時代の体験がもとなる。人生経験豊かな祖父母から→孫への継承ルートが閉塞した現在、古式の失われるのも止むを得ない。以上年中行事衰微の原因をあれこれ論じてきたが、近年注目に値する傾向がある。これは伝統芸能（獅子舞、囃子等）の復活運動で、保存会が続出している。これは一体どうしたことであろうか。獅子舞にいまさら雨乞いや豊作祈願を期待するものはいないが、伝統の郷土芸能の修得を通して、日本の風土の中に流れる情感を肌で感じたり、集落内の人間の交流を復活したりする。それがねらいのようである。バラバラに砂漠化した集団内の人間関係のオアシスとなるものが、例えばお囃子保存会であったりする。そこでは年寄が子供達の手をとって伝統の技術を伝授する。子供相互の間にも、年長者が年少者をリードする縦の交流が生れる。心の交流と連帯の復活は今だからこそ重要であろう。

年中行事は当然時代とともに変わってゆく。伝統の行事は衰微しても、現在にふさわしい行事が新しく興ればよい。それは、まず、①人間の心を培い、相互の交流と連帯を進めるもの。②健康的で、自然に親しみ、季節感のあふれるものでありたい。さまざまの試みのうち、たまたま時宜にかなない継続されれば、それが新しい伝統行事となる。また古い革袋に新しい酒をつめてもよからう。願わくば物質万能の世にあって“こころの時代”を招きよせるものであってほしい。（石井）

○ふるさとを学ぶ会では、年寄からの聞きとりを中心に地域の伝承をあつめたいと計画しております。

参加ご希望者は、五日市郷土館、または大場智子氏（☎96-1041）まで。